

# 北野恒富『御深曾木』と『祐宮御肖像』について——館蔵品紹介——

明尾圭造

## 一、聖徳記念絵画館

明治四五年七月三〇日に明治天皇は崩御された。御陵が伏見桃山に内定していたため、東京の人々は天皇の御心霊が鎮座する神社の創建をもとめ、その結果、明治神宮（内苑）と神宮外苑が作られた。そして外苑の中心施設として建設されたのが聖徳記念絵画館（大正十五年竣工）である。この絵画館には、明治天皇の生涯を軸に、幕末から明治の日本を代表する画家達が描いた八〇点の巨大壁画が陳列された。その内訳は、日本画が四〇点、洋画が四〇点となっている。大阪からは、男爵鴻池善右衛門寄贈による北野恒富『御深曾木』と大阪市寄贈による菅楯彦『皇后冊立』の二点の日本画が出品されている。

大正七年に起工した絵画館は、大正十二年九月に発生した関東大震

災もくぐり抜け、七年の歳月をかけて完成した。耐震耐火設計された当館は、戦時中の東京大空襲の際に二発の焼夷弾が落下したものの建物・壁画ともに無事であった。建物の横幅は、約一一メートル、左右に伸びている部分が画室で、向かって右側が日本画室、左が洋画室となっている。展示される八〇点の絵画はいずれも壁にかける壁画となっており、その大きさは縦約三メートル、横約二・七メートルという巨大なものである。日本画家にとつては経験の無いサイズであったろうと思われるが、結果として八〇点すべてが出揃ったのは昭和十一年四月のことであったという。いずれにせよ、明治から昭和を代表する画家の渾身の作品が同サイズで並ぶ様は壮観で、近代日本を代表する画家の一代陳列場と言っても過言ではないだろう。

## 二、北野恒富『御深曾木』

本作（口絵1）は、万延元年（一八六〇）閏三月十六日、京都御所御三間において行われた祐宮（後の明治天皇）の御深曾木の儀を描いた作品で、明治天皇の事績を絵画によって集大成した明治神宮外苑聖徳記念絵画館に奉納（鴻池善右衛門）された北野恒富の大作『御深曾木』（おんふかそぎ）（口絵2）を本図とする。制作の意図は不明だが、同図より『祐宮御肖像』だけを円窓にて抽出した作品となっている。

作家の北野恒富（一八八〇～一九四七）は旧加賀藩士族北野嘉左衛門の三男として、明治十三年に石川県金沢市十軒町で生まれた（本名富太郎）。小学校卒業後、木版の版下彫刻に従事し、余暇に南画を習い、地元北國新聞に勤めながら新聞挿絵を研究、同三〇年、画家を志して大阪に移り、翌年、歌川派の稲野年恒について浮世絵を学ぶ。同三四年に大阪新報社に入社して小説挿絵を担当、次第に頭角を現した。同四三年に第4回文展に《すだく虫》を出品したほか、「朝のクラブ齒磨」ポスターを製作。翌四四年の第5回文展で《日照雨》が三等賞受賞し、新進画家として注目される。大正三年には白耀社を結成し後進の指導にも力を入れ始める。同四年には第9回文展に《暖か》で褒状を受け、同六年には日本美術院同人となる。以後、院展に《淀君》《茶々殿》《ゆうべ》《むすめ》《涼み》などを出品し、独自の画境を深めていった。

## 三、御深曾木の儀

恒富が描く「御深曾木」とは、世上の七五三のルーツとなった儀式のひとつで、三歳で髪置（かみおき）してのち、五歳頃に童幼の髪をすそを切りそろえて成長を祝う儀礼のこと。初めて袴を着けられるので、御着袴（おちやくこ）ともいわれる。曾木は削ぐの当て字である。「かみそぎ」を髪（註）の豊かであるよう、祝意を込めていう語。また、その髪形を言う。本図は、万延元年閏三月十六日、祐宮（後の明治天皇）の御深曾木の儀の模様を描いた作品で、日本画室の二番目に陳列されている。本図に附された解説を以下に紹介してみよう。

万延元年閏三月十六日（太陽暦五月六日） 祐宮御年九、御深曾木ノ禮ヲ御三間ニ行ハセラル、是日 御父帝（孝明天皇）上段ノ御座ニ出後シ、議奏・伝奏等下段ニ候ス。御鬢親左大臣一条忠香、召ニ依リテ中段ニ詣ル。殿上人二人、碁盤一基ヲ以テ中段ノ御座ノ上ニ置キ、其ノ傍ニ御理髪ノ具ヲ置ク。 宮、御手ニ小松ト山橘トヲ把リ、出テ碁盤ニ上リ、予メ盤上ニ置カレタル二ツノ小石ヲ履ミ、吉方（東南方）ニ向ヒテ立タセタマフ。忠香乃チ宮ノ御後ニ進ミテ御鬢ヲ理シタテマツル。終リテ 宮、碁盤ヲ下リ給ヘリ。是レ即チ御鬢ヲ整フル式ニシテ、我ガ古俗結髪ニ対スル一ノ準備タルナリ。又始メテ袴ヲ著シタマフ例ナルヲ以テニ御著袴トモ曰フ。

図八、萬延元年閏三月十六日、京都御所御三間二於テ、御深曾木ノ禮ヲ行ハセラルルノ光景ナリ。

(奉納者 男爵 鴻池善右衛門 揮毫者 北野恒富)

金雲に彩られた京都御所御三間では、上段の間に御父孝明天皇の存在が感ぜられ、御簾越しに見える従者とは対比的に祐宮だけがスポットを浴びるかの如く描かれている。手には、小松と山橘を持ち、中央の碁盤に上られ、盤上に置かれた二つの石をふみ、東南方に向つてお立ちになり、左大臣一條忠香が御鬢を整えているところである。後には、少将掌侍今城重子、大典侍中山續子、宰相典侍庭田嗣子が控えている。何れも御簾越しながら凝視すれば、その表情や衣装の描きぶりには徹底した描写力が生かされている。

聖徳記念館に陳列される『御深曾木』の構成は上記の通りだが、金散らしの背景のなか、円窓に描かれた祐宮の表情は、待ち受ける運命を象徴するかのような荘厳な面持ちが感ぜられる。いずれにしても、奉納した本図のなから特別に注文を受けた作品であろうか、類例のない金落款(口絵<sup>3</sup>)に恒富の思いが現れている。作画時期については、昭和九年に聖徳記念絵画館に奉納されて以降のものと考えられる。

一方で、昭和九年に聖徳記念絵画館に奉納された本図は、花園にあった恒富の画室で描かれたもので東京に向けて搬出される時には、地域住民が手を合わせて見送ったというエピソード(北野悦子談)が

あるが、本図を制作するために「改築した画室で大きな下図を作り上げて、これを実際に絵画館に掲げて制作<sup>(註2)</sup>」したとする記述もある。

#### 註

註1 『聖徳記念絵画館壁画解説』財団法人明治神宮奉賛会発行(昭和八年)

註2 『聖徳記念絵画館オフィシャルガイド』幕末明治を一望する』明治神宮外苑編 東京書籍(平成二八年)

